



Title	新型コロナウイルス流行下における傷つきの社会文化的意味の予備的考察：Twitterにおける「傷つく」の使用から
Author(s)	中川，佳保
Citation	言語文化共同研究プロジェクト．2021，2020，p. 31-40
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/85094
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

新型コロナウイルス流行下における傷つきの社会文化的意味の予備的考察 —Twitter における「傷つく」の使用から—

中川 佳保

1. はじめに

1.1 背景と目的

傷つくことに敏感になり、自分や相手を傷つけないようにすることが、現代の日本社会において、一つの潮流をなしている。例えば、大平（1995）や土井（2008）では、自分や相手が傷つかないように人間関係を構築する青年たちの姿が描かれている。また、和田（2004）や信田（2013）、井川（2019）のように、青年に限らず、自分のことを傷つきやすいと考えている人や傷ついた経験を持つ人に向けてアドバイスをするような一般向けの著作も発行されており、傷つくことはそれだけの関心を集めていると考えられる。もちろん、傷つきやすさには個人差があるのだが、昨今では、傷つきにくいと自認している人であっても、傷つくこと（以下「傷つき」とする）に注意を払わなければならないとなっている。というのは、たとえ自分が傷つきにくくとも、相手を傷つけないよう配慮することが社会的に要請されるようになってきているからである。その証左として、トラウマの判断基準が被害者の主観に依拠するようになってきていることや（Lukianoff & Haidt 2018: 26）、ハラスメントが「他者に対する発言・行動等が本人の意図には関係なく、相手を不快にさせたり、尊厳を傷つけたり、不利益を与えたり、脅威を与えること」¹と定義づけられていることが挙げられる。

本研究の目的は、「傷つく」という言葉が使われるコミュニケーション出来事、特に、「傷つく」という言葉を含む Twitter 上の投稿を言語人類学の枠組みを用いて分析することで、現代の日本社会において忌避されている傷つきがどのような社会文化的意味を持つものなのかを明らかにするための予備的考察をすることである。

1.2 本稿における「傷」の範囲

「人が傷つく」という場合の「傷」には、トラウマや、ハラスメントによるもの、いずれにも含まれないものがある。トラウマを簡単に定義すると、「心の傷」（宮地 2013: i）や「心に残った傷」（小西 2006: 24）となるが、「精神医学や心理学の分野では、過去の出来事によって心が耐えられないほどの衝撃を受け、それが同じような恐怖や不快感をもたらし続け、現在まで影響を及ぼし続ける状態」（宮地 2013: 3）と捉えられている。トラウマは、軽く「あのことがトラウマになっちゃって」などと言えるような単なる心の傷ではなく、言葉にすることができなかつたり、その話題になるとその場を離れたくなったりするほどの深い傷である（ibid.）。また、トラウマの特徴として、それをもたらすのが衝撃的な出来事であるという点も挙げられる（ibid.）。具体的には、戦争、強盗や殺傷事件などの犯罪被害、性暴力、家庭内暴力、虐待、自然災害、交通事故、

1

<https://www.osaka-med.ac.jp/deps/jinji/harassment/definition.htm#:~:text=%E3%83%8F%E3%83%A9%E3%82%B9%E3%83%A1%E3%83%B3%E3%83%88%E3%83%8F%BC%88Harassment%E3%81%A8%E3%81%AF%E3%81%84%E3%82%8D%E3%81%84%E3%82%8D,%E3%82%92%E3%81%94%E7%B4%B9%E4%BB%8B%E3%81%97%E3%81%BE%E3%81%99%E3%80%82>
2021/03/31 最終アクセス

ビルの倒壊、火災、災害、拷問、いじめ、ハラスメントなどがあげられる（ハーバート 1999; 小西 2006; 宮地 2013; 小西ら 2018）。

トラウマの反対側には、自力で、短期間で対処できるものが位置づけられる。例えば、特別養護老人ホームの介護労働者が利用者やその家族からの言葉で傷ついた体験をどのように乗り越えたかをインタビュー調査した吉田（2011）は、乗り越えた方法に、深く考えずに割り切る、忘れる、気分を変えるとといった、個人的な対処法がとられていたことを報告している。

本稿で捉えようとするのは、このように、トラウマのように医療制度の中で治療を要することも、ハラスメントのように組織での制度的な措置をとることもない程度の、日々にありふれた傷つきである。また、マイクロアグレッション（Sue et al. 2007）のようにレイシズムなど特定の文脈に限らず、あらゆる場面でだれもが経験しうる傷つきを対象とする。

2. 研究方法

2.1 データ

本稿では、「傷つく」という言葉が生起する出来事の一つとして、SNS（ソーシャルメディア・ネットワーク・サービス）の Twitter から収集したデータを分析する。具体的には、Twitter 上の検索機能を用いて、(a)「傷つく」（あるいは「傷付く」、「きずつく」）を含み、(b)2020 年 1 月 1 日から同年 12 月 31 日の間に投稿され、(c)1000 以上の「いいね」がつけられたツイートおよびそれにツリー機能を用いてつながられたツイートのうち、(d)「コロナ」が使用されているものを分析する。該当するツイートは全 5 件 12 ツイートであるが、紙幅の都合上、そのうち 2 件（3 ツイート）を本稿では取り上げる。ここで、(c)の条件設定の動機として、「いいね」の意味について補足しておく。Twitter 社のヘルプセンターによると、「いいね」とは、「ツイートに対する好意的な気持ちを示すために」使われる²。また、評論家の荻上チキと社会心理学者の高史明が行ったアンケート調査³によると、ユーザーが「いいね」をするのは、投稿を面白いと思ったとき（62.7%）、投稿に共感したとき（55.9%）、投稿を重要な情報だと思ったとき（43.3%）、投稿を後から読み返したいとき（22.6%）であった。後半の二つの場合には、必ずしもユーザーが「いいね」した投稿に対して好意的あるいは肯定的な気持ちを持っているとは限らないが、少なくともユーザーがその投稿に関心を寄せているとはいえるであろう。したがって、(c)に挙げた 1000 以上の「いいね」を得た投稿というのは、ある程度広く、社会的に、肯定的な感情や関心を集めたものであり、そのようなツイートを分析することは本稿の目的に適していると考えられる。

2.2 分析に用いる概念

ツイートを分析するにあたって、本稿は、言語人類学の枠組みに依拠する。まず、本稿の分析に通底する概念として、コンテキスト化とテキスト化（小山 2008; 榎本 2019）について説明する。これは、ある出来事が、それを取り巻くコンテキストを指標するあるいは指し示すこと（コンテキスト化）を通じて、そのコンテキストとの関連性のなかで、社会文化的に意味をもつテキストとして認識可能になる（テキスト化）、というプロセスを概念化したものである。指し示されるコンテキストには、例えば、それまでの発話や参加者、そのやりとりの目的、やりとりの媒

² <https://help.twitter.com/ja/using-twitter/liking-tweets-and-moments> 2021/03/31 最終アクセス

³ <https://www.buzzfeed.com/jp/kensukeseya/iine-twitter-1> 2021/03/31 最終アクセス

体、規範などがあるが、理論上はあらゆるものがコンテキストとなりうる。また、コンテキストの指標には、前提的な指標と創出的な指標という二種類がある（Silverstein 1976）。前提的な指標とは、ある言語使用をその状況において適切なものとするようなコンテキストの指標のことであり、創出的な指標とは、ある言語使用によって明示化されたり（made explicit）つくりだされたり（made to exist）するコンテキストの指標のことである。例えば、食卓で塩をとって欲しいときに言う「それとって」という言語使用は、「それ」が指示する塩がなければ、意味が分からないものとなる。このような場合に、食卓に塩があるという状況が前提的なコンテキストとして指標され、また、そのコンテキストが指標されることで、「それとって」が「塩をとってほしい」と要求する発話として認識可能なテキストとなる。また、普段はタメ口で話している友人にお金を借りるときに「お金を貸してくれませんか」と敬語を使用することは、その時に友人との間に社会的な距離があるというコンテキストを創出的に指標する。

先に理論上はあらゆるものがコンテキストとなりうると述べたが、ある言語使用がどのようなコンテキストを指標するかは、実際のコミュニケーションではある程度決まってくる（さもなくば、その言語使用は解釈できない）。これは、その言語使用がどのコンテキストを指標するかを統制する（メタ語用的に機能する）記号の働きによる。メタ語用的に機能する記号にはいくつかあるが、本稿の分析で重要となるのは、詩的機能（Jakobson 1960）である。詩的機能とは、Jakobson（1960）が示した 6 機能モデルに含まれるものである。Jakobson は、コミュニケーション出来事の構成要素としてメッセージ、メッセージの送り手、メッセージの受け手、メッセージが伝達されるための経路、メッセージの言及対象、メッセージが解釈されるコードの六つを定め、メッセージにはそれぞれの要素を志向した機能があるとした。詩的機能は、六つの要素のうちメッセージそのものを志向した機能で、「等価の原理を選択の軸から結合の軸に投影するもの」ものである（ibid.: 358）。詩的機能に関して重要なのは、類似した形式の反復によって、その形式を一つのテキストとして解釈可能にしたり、その反復が生起する出来事をまとまりや結束性があるものとして解釈可能にしたりすることである。詩的機能が卓越して役割を果たすのは、韻文やだじゃれであるが、言語形式だけでなく、儀式のような相互行為の次元にも、また、日常的、散文的なコミュニケーションにも詩的機能はみられる（Silverstein 1985; 榎本 2019）。また、詩的機能が作用する反復構造は、その相互行為の参加者にはあまり明瞭には意識化されないという特徴がある（小山 2011）。

以上の概念を用いて、「傷つく」を含むツイートのテキスト化のプロセスを分析していく。特に、「傷つく」という言葉が生起する出来事に共通する構造はないか、あるとしたらどのようなものか、「傷つく」という言葉の生起によってどのようなコンテキストがその出来事に関連づけられるのか、といった点を明らかにしていくことで、「傷つく」と言うことや傷つきが持つ社会文化的意味の検討を試みる。

3. 分析

3.1 「みんな違って、全部いい」

分析する一つのツイート⁴は、以下の、2020年2月28日に投稿された、あるバンドのメンバーによるものである。()内の数字は筆者による。

テレビやTwitterでの僕の発信は、賛否を測りたい訳でも、言い争いをさせたい訳でもないです。だからどんな意見があってもいいんです。 (①)

立ち向かうべきはコロナウイルスという認識はみな同じ。 (②)

それ以外の部分で、賛否で、言い争いで、鬨い傷付く必要はないと思います。 (③)

みんな違って、全部いい。 (④)

このツイートでは、改行によって文の間に空白が作られ、ツイート全体の中に四つのまとまりができています (①～④)。

①は、「テレビやTwitterでの僕の発信」という言葉で始まっている。これは投稿主のTwitterでの過去の発信をその指示対象の一部に含むと考えられるが、のちに続く「賛否を測りたい訳でも、言い争いをさせたい訳でもない」という部分から、「僕の発信」が「賛否」や「言い争い」が生まれるきっかけ (コンテキスト) となっていることがわかる。Twitterでは、「いいね」やRT機能 (転送機能) によって投稿が拡散されるにつれて、投稿に対するリプライや言及、つまり、「賛否」や「言い争い」が増えていく。そのようなTwitter上の投稿を遡って探してみると、2月26日に、首相からのイベントの中止・延期要請をうけて、3月1日に開催予定であったライブを中止するという発表をしたツイート⁵が投稿されていた。このツイートのリプライ欄には、投稿主のバンドのファンに限らず、様々なアカウントから、賛同や批判のコメントが集まっている (分析対象のツイートに対してはファンと思われるアカウントからの支持や賛同、応援のコメントがほとんどであるのと対照的である)。さらに、翌27日には、ライブ中止に関して投稿主がテレビ朝日からインタビューを受け、テレビ番組で報道されるという旨がツイートされている。したがって、①で言及されている「テレビやTwitterでの僕の発信」は、26日の投稿やそれに関連するテレビ番組出演での発信を指しており、「賛否」と「言い争い」は、それらの発信に対する反応であるといえよう。言い換えると、①は、これらの過去のコミュニケーションが前提的に指標しており、それに対する反応というコミュニケーションに対して投稿主が「賛否」や「言い争い」を生みたいわけではなかったと見解を示すという、メタ的な発信になっている。

②では、「コロナウイルス」という明示的な言語使用によって、新型コロナウイルス流行という社会的なコンテキストが言及されている。「立ち向かうべきは」によって、対立すべき相手はコロナウイルスであるという構図が、また、「みな同じ」の部分では、「みな」と言うことによって、

⁴ <https://twitter.com/Ace8trriger/status/1233352581683875840> 2021/03/31 最終アクセス

⁵ <https://twitter.com/Ace8trriger/status/1232599341912641537> 2021/03/31 最終アクセス

①で「賛否」や「言い争い」で対立していた人々が一つのグループに属するというコンテキストが創出されている。つまり、②では、①で「賛否」や「言い争い」で対立していた人々を「みな」としてひとくくりにし、その「みな」と新型コロナウイルスを対立させるという構図が創り出されている。

③では、最初に「それ」という代名詞が使用されているが、この「それ」は②の部分を示すものであり、それによって③と②との結びつきが強まっている。また、①で使用された「賛否」と「言い争い」が繰り返されているが、ここでは、①を前提とした③での繰り返しという形で①と③の間に連続性やまとまりが生み出されている。また、そのような「賛否」と「言い争い」を「新型コロナウイルス」へ立ち向かうこと以外の部分として位置づけることで、①から③までの間の関連性が生み出されている。また、③の「**賛否で、言い争いで、闘い傷つく必要はない**」という部分では、投稿主の過去の発信に起因する「賛否」や「言い争い」によって誰かが傷ついていることや、「賛否」や「言い争い」が誰かを傷つけるものであることが前提的にコンテキスト化されている。また、「必要はない」という部分では、傷つくという経験に対する投稿主の否定的な価値観が指標されている。

そして④では、「みんな違って、全部いい。」と、賛否や言い争いに表出する「みんな」の違いを「全部いい」という言葉で肯定して、ツイートを締めくくっている。「全部いい」という部分は、①の「どんな意見があってもいい」という部分と使用されている語彙は異なるものの、言及指示的な意味（言われていること）が類似しており、この点で①と④の間には類似性が見出される。こうして、①から③までの関連性と、①と④の間の類似性によって、このツイートが一つのまとまりをもつように結び付けられている。⁶

ただし、①は、投稿主の過去の発信に対して起きた「賛否」や「言い争い」に対して「どんな意見があってもいい」と述べられたものであるのに対して、④は、②と③を経て、「賛否」や「言い争い」によって傷つく必要はないという価値観を前提とした、「みんな違って、全部いい」という肯定となっている。ここでは、「みな」の意見の違いをそのままにしたまま「全部いい」と肯定することで、傷つきを防ぐ、あるいは回避することが志向されている。つまり、①と④の間には類似性があるものの、④では、②と③を通じて、「全部いい」というメッセージが、傷つきの回避を志向した道德律のようなものに変容しているのである。

まとめると、このツイートでは、まず、過去のコミュニケーションに対するメタコミュニケーションという形をとって、投稿主の過去の発信が前提的なコンテキストとなって生まれた賛否や言い争いに対し、投稿主はそれを望んでいたわけではないことが示されている。そして、対立する人々を「みな」と一つにまとめ、その対立すべき相手を新型コロナウイルスとすることによって、「みな」の間の賛否や言い争いで傷つくことを必要ないものとしている。これらを受けて、最後には、「みんな違って、全部いい」と「みな」の間の違いを肯定して締められている。

3.2 悩み

次の分析データは、2020年4月9日に投稿された匿名アカウントによる以下のツイート^{7,8}であ

⁶ ④の「みんな違って」と②の「みな同じ」との矛盾については、4.で取り上げる。

⁷ <https://twitter.com/badassceo/status/1248188816575217665> 2021/03/31 最終アクセス

⁸ <https://twitter.com/badassceo/status/1248188902793302022> 2021/03/31 最終アクセス

る。このアカウントは、プロフィール欄に「筋トレが好きです！」とあるように、主に筋トレを推奨するツイートをしている。また、筋トレを推奨するという体をとって（時にはとらず）、いわゆる「メンタル」が弱い人に対するアドバイスのようなツイートもしている。以下で分析するツイートは、ツリー機能を用いて二つのツイートが一つにつながられたもので、二つ目のツイートで「傷つく」が使用されている。以下のツイートは、3.1 で分析したものとは異なり、改行がされていないため、一文ごとに番号が付されている。

コロナが出現する前に抱えてた悩みの9割ぐらいどうでも良くなってない？ (⑤) 俺はなってる。(⑥) 巨大な問題が襲いかかってくると今まで悩んでいたことがどうでもよくなるこの感覚、俺は嫌いじゃない。(⑦) 悩みなんてその程度の存在だと思えると目の前の悩みもぶっ飛ばしてやろうという気力と勇気が湧いてくる。(⑧)

とはいえ、悩みに大小なんてないということは常に認識しておかなければならない。(⑨) 絶対に人の悩みを笑ったらダメ。(⑩) 外から見ると大したことないように見える悩みでも、悩んでる本人にとっては死活問題だったりする。(⑪) それを笑うと笑われた人はとても傷付き、人としてやっちゃいけない行為だと思います。(⑫)

この二つのツイートでは、二つにまたがって「悩み」という名詞と「悩む」という動詞が繰り返されており (⑤、⑦、⑧、⑨、⑪)、それによって二つのツイートに一つのまとまりが生み出されている。しかし、以下に述べる通り、二つのツイートの間には差異もある。

まず一つ目のツイートでは、「コロナ」という「巨大な問題」の出現によって、それまでの「悩み」がどうでもよくなるという感覚を投稿主が抱えていることが述べられている。ここでは、「コロナが出現する前に抱えてた」という表現によって、新型コロナウイルス流行の前と後という認識枠組みが創り出されており、前と後で悩みに対する投稿主の捉え方が変化していることが述べられている。また、新型コロナウイルス流行は「巨大な問題」として悩みと対比される対象とされ、悩みを小さくするものとして語られている。そして、それが今度は前提的なコンテキストとなって、「その程度の存在だと思えると目の前の悩みもぶっ飛ばしてやろうという気力と勇気が湧いてくる」と、悩みに対して積極的に向き合う投稿主の姿勢を示すテキストとなっている。

続く二つ目のツイートでは、「とはいえ」という逆接の接続詞を用いて、悩みに大小はなく、人の悩みを笑ってはいけないと述べられたのち、人の悩みを笑うという行為が、その人を傷つけるものであり、かつ、やってはいけない行為であるとされている。ここでは、人を傷つける行為はやってはいけないことであるという価値観が前提的にコンテキスト化されており、この価値観が、人の悩みを笑うという行為の禁止という形で表れている。また、このツイートの詩的構造をみると、⑨と⑪が、悩みに大小はないことを（「悩みに大小なんてない」、「外から見ると大したことないように見える悩みでも、悩んでる本人にとっては死活問題」）、⑩と⑫が、悩みを笑ってはいけないことを（「絶対に人の悩みを笑ったらダメ」、「それを笑うと...人としてやっちゃいけない行為」）伝えるというふうにペアを成しており、一文おきに言い換えをするような構造になっている。これは、前半部分を後半部分で言い換えるような構造としてもみなすことができ、この構造によって⑨から⑫の間に関連性が生み出されている。

二つのツイートを比べてみると、⑨における「悩みに大小はない」という価値観の導入は、一

見、「悩みなんてその程度」と述べていた⑤と矛盾するように見える。しかしながら、一つ目のツイートでは「俺」という一人称代名詞が繰り返されているのに対して、二つ目のツイートでは「人」という名詞が繰り返されているという対比に注目すると、一つ目のツイートは「俺」すなわち投稿主個人の悩みに対する見方について、二つ目のツイートは「人」すなわち他人の悩みに対する見方について言及したツイートであるという対照的な解釈が可能となる。また、前者では新型コロナウイルス流行という問題の出現によって悩みが小さくなっているのに対して、後者では、悩みに大小はないと、各人にとっての悩みの大ききの判断を留保するというように、悩みの大きさも対照的に創り出されている。さらに、一つ目での「俺」、二つ目での「人」の繰り返しという対比を名詞句階層 (Silverstein 1981) に照らして捉えなおしてみると、⑤で使用されている「俺」は発話者を指示する一人称単数代名詞であり、より「今・ここ」に近いのに対して、⑥で使用されている「人」は存在名詞であり、「今・ここ」で起きている個別の発話出来事の外部に位置づけられる。このことから、⑤で述べられている、新型コロナウイルス流行という問題の出現によってそれまでの悩みがどうでもよくなるという感覚が嫌いではないのは、あくまで「今・ここ」の「俺」つまり投稿主に限った感覚である一方、⑥で述べられている、悩みに大小はなく、人の悩みを笑うことは人を傷付ける行為であるやってはいけないという道徳的な主張は、「俺」に限らず、「人」に関する、より脱コンテクスト的な、すなわちよりマクロな次元に位置づけられていると考えられる。また、このような、投稿主個人に関わる部分から、個人間の差や違いに注意を向け、道徳的な、より抽象的な道徳律に着地するという展開は、3.1 で分析したツイートと共通するものである。

3.3 二つのツイートに共通する構造

ここまで、二つのツイートを個別にみてきたが、「傷つく」という言葉が生起するツイートとして、両者に共通する構造を探ってみたい。

まず、前節の最後に触れた通り、どちらのツイートも、(a) 投稿主個人にまつわる事柄からはじまって、(b) 投稿主以外の個人間の違いを否定すべきでないものとして示し、(c) より抽象的な道徳律で終わるという展開になっている。3.1 のツイートは、(a-1) ①の「テレビや Twitter での僕の発信は、…」という投稿主「僕」の過去の発信の言及から始まり、(b-1) 「どんな意見があってもいいんです」と意見の差異の容認ののち、(c-1) ④の「みんな違って、全部いい」という道徳的な主張で終わられている。また、3.2 のツイートにおいては、(a-2) 一つ目のツイートの⑤から⑧までが「俺」の悩みに対する姿勢に関するものとなっており、(b-2) 二つ目のツイートの⑨と⑪で悩みに大小はなく外からは本人の悩みの大ききはわからないことが述べられ、(c-2) ⑩と⑫で悩みを笑うことが人として絶対にしてはならない行為であるという道徳律が示されている。このように、今回分析した二つのツイートはいずれも、投稿主個人の話題から、個人間の差異の容認を経由して、道徳律に至るという構造となっている。

また、「傷つく」が生起している部分を軸に二つのツイートをみると、どちらも、(d) 前半部で誰かを傷つけるとされている行為が否定的に語られ、(e) 「傷つく」の直前でその行為への言及が繰り返され、その行為によって誰かが「傷つく」ことが述べられ、そして、(f) その行為はする必要がない、あるいはすべきでないものであるという主張の反復に続くという構造になっている。具体的には、3.1 のツイートでは、(d-1) まず①で「賛否を測りたい訳でも、言い争いをさせたい訳でもない」と「賛否」や「言い争い」が投稿主の望まないものであることが示され、(e-1) ③

で再度「賛否」と「言い争い」への言及があり、「賛否で、言い争いで傷付く」と、それによって誰かが傷ついていることが、(f-1) さらに、それに続く部分で、「傷付く必要はないと思います」と、その行為は必要ないものであることが再度言われている。また、3.2 では、(d-2) まず⑩で「絶対に人の悩みを笑ったらダメ」と人の悩みを笑うという行為を禁止し、(e-2) ⑫で「それを笑うと笑われた人はとても傷付く」と、その行為によって人が傷付くことが、(f-2) またそれに続いて「人としてやっちゃいけない行為だと思います」と、⑩の繰り返しで、その行為がしてはいけないものであることが主張されている。この構造においては、人を傷つけるとされる行為がまず否定的に位置づけられ、その行為が誰かを傷つけることを根拠として、再度その行為を、必要ない、あるいはしてはいけない行為として、否定している。これは、行為を制限する根拠として傷つきを用いているともいえるだろう。

4. 考察

ここまで、二つのツイートを個別に分析し、それらに共通する構造として、投稿主の話題から個人間の差異の容認を通して道徳律に至るという展開、誰かが傷つくことを根拠としてさしはさんだ、誰かを傷つけるとされる行為の制限・禁止の繰り返しという二つを見出した。本節では、一つ目の構造がはらむ矛盾を切り口に、二つの関係を考察する。

まず、一つ目の構造の矛盾について説明する。注目したいのは、個人間の差異を容認（あるいは強調）していながら、抽象的な道徳律を唱えるという部分である。道徳律というのは、それが作用する集団、本稿で分析したツイートでいえば、「みんな」(④) や「人」(⑫) の均質性、同質性を前提としたものである。しかしながら、同時に、「みんな違って、全部いい」(④)、「悩みに大小なんてないということは常に認識しておかなければならない」(⑨) と、個人間の差異、異質性を強調し、受容するよう促してもいる。つまり、個人間の異質性を強調するツイートで、同質性を前提とした道徳律が説かれているという矛盾が起きているのである。

では、ここで前提とされている同質性とは、どのようなものなのであろうか。その同質性を指し示す手がかりとして、二つ目の構造である、傷つきを根拠とした行為の制限・禁止を導入する。繰り返しになるが、3. で分析したツイートでは、「賛否で、言い争いで傷付く」(③)、「それ（本人にとっては死活問題である悩み）を笑うと笑われた人はとても傷付く」(⑫) というように、「賛否」や「言い争い」や「悩みを笑われる」ことが、人を傷つける行為とされており、そのことを根拠として、これらは「必要がない」、「人としてやっちゃいけない行為」とされていた。3. では、こうした行為の制限や禁止が、傷つきの回避を志向したものであると述べたが、ここでのさらなる前提として、「賛否」や「言い争い」や「悩みを笑われる」ことによって人が傷つくものであること、それほど人が傷つきやすい存在であることが挙げられる。したがって、本稿の分析対象のツイートで前提とされている同質性の一つの候補として、このような、人の傷つきやすさが考えられる。

このことをふまえると、分析対象となったツイートでは、投稿主に関する話題を起点として、個人間の異質性を強調しながらも、人の傷つきやすさという同質性を前提として、道徳律のような主張がされていると考えられる。もちろん、傷つきやすさにも個人間で差異があるのだが（西谷 2017）、その差異はここでは捨象され、傷つきやすさが均質的なものとされている。また、こうしたツイートを通じて、異質性が強調される裏で、人の傷つきやすさがさらに前提化されていると考えられる。

5. 結語

本稿では、「傷つく」という言葉が生起するツイート2件を対象として、特に詩的構造に注目しながら、それぞれのツイートがどのような構造を持っているのか、また、二つのツイートに共通する構造を分析した。共通する構造として、(1) 投稿主の話題から、個人間の差異の容認を通して、道徳律に至るという展開、(2) 誰かが傷つくことを根拠としてさしはさんだ、誰かを傷つけるとされる行為の制限・禁止の繰り返しという二つを見出した。また、(1) にみられる同質性と異質性の矛盾に着目して、分析対象のツイートが、個人間の差異を強調しながらも、人の傷つきやすさは均質的なものとして前提とされていることと、そうしたツイートを通じて、人が傷つきやすいことがさらに前提化されている可能性を考察した。

今後の研究では、本稿であまり触れられなかったコンテキスト化のパターンに焦点を置いた分析が必要である。また、本稿の分析はあくまで予備的なものであり、本稿で見出した共通する構造は、分析対象以外のツイートにも必ずしも適用できるわけではないため、さらに分析事例を増やし、構造のパターンを類型化していくことも今後の課題である。他に、本稿で分析したツイートは、いずれも傷つく主体が投稿主ではなく、第三者の視点から「傷つく」が使用されていたが、投稿主が傷つく主体である場合も射程に含む必要があるだろう。これらを通じて、「傷つく」という言葉の使用や、傷つきがもつ社会文化的意味の諸相を多面的に明らかにしていく。

参考文献

- Jakobson, R. (1960). "Closing statement: Linguistics and poetics." In T. Sebeok (Ed.), *Style in language* (pp.350-377). Cambridge: Massachusetts Institute of Technology Press.
- Lukianoff, G. & Haidt, J. (2019). *The Coddling of the American Mind: How Good Intentions and Bad Ideas Are Setting Up a Generation for Failure*. UK: Penguin Books.
- Silverstein, M. (1976). "Shifters, linguistic categories, and cultural description." In Keith H. Basso and Henry A. Selby (Eds.), *Meaning in Anthropology* (pp.11-55). Albuquerque, N. M.: University of New Mexico Press.
- Silverstein, M. (1981). Case marking and the nature of language. *Australian Journal of Linguistics*, 1, 227-247.
- Silverstein, M. (1985). On the pragmatic "poetry" of prose: parallelism, repetition, and cohesive structure in the time course of dyadic conversation. In Schifffrin, Deborah (Ed.), *Meaning, Form, and Use in Context: Linguistic Applications* (pp. 181-199). Washington, DC: Georgetown University Press.
- Sue, D. W., Capodilupo, C. M., Torino, G. C., Bucceri, J. M., Holder, A. M. B., Nadal, K. L., & Esquilin, M. E., 2007, "Racial Microaggressions in Everyday Life: Implications for Clinical Practice." *American Psychologist*, 62: 271-86.
- 井川裕覚 (2019). 『他人の言葉に傷つくあなたは幸運な人』 双葉社
- 大平健 (1995). 『やさしさの精神病理』 岩波新書
- 小西聖子 (2006). 『増補新版 犯罪被害者の心の傷』 白水社
- 小西聖子・金子雅臣・大塚雄作 (2018). 「VI ハラスメント防止委員会企画講演 ハラスメント被害者の心理的回復」 *教育心理学年報*, 57, 309-328.
- 小山亘 (2008). 『記号の系譜—社会記号論系言語人類学の射程』 三元社
- 小山亘 (2011). 『近代言語イデオロギー論—記号の地政とメタ・コミュニケーションの社会史』 三元社
- 土井隆義 (2008). 『友だち地獄』 ちくま新書
- 西谷健次 (2017). 「皮肉発話の理解と対人的傷つきやすさの関連について—他者の傷つきへの共

- 感性と自己の傷つきへの敏感性に注目して」作大論集, 7, 55-65.
- 信田さよ子 (2013). 『傷つく人、傷つける人』集英社
- ハーバート, クラウディア (勝田吉彰訳) (1999). 『心に傷をうけた人の心のケア—PTSD(心的外傷後ストレス症候群)を起こさないために』保健同人社
- 宮地尚子 (2013). 『トラウマ』岩波新書
- 吉田輝美 (2011). 「介護労働者が受ける利用者やその家族からの言葉による傷つきへの対処方法の研究—特別養護老人ホームの介護労働者が受ける言葉による傷つき克服のインタビュー調査より」人間関係学研究, 17(2), 29-42.
- 和田秀樹 (2004). 『自分のことを「傷つきやすい」と感じている人へ—「イヤなこと」が消える60の処方』全日出版